



上の地図はインターネット(<http://japanese.dljzly.com/map/mapjp.html>)に基づいて改変した

■ はじめに

中国に10年も暮らしていながら、西安・無錫・南昌・上海・昆明そして現在の大连と、住んでいるのは皆大都会ばかりです。そして、折りにふれて各地の名所古跡をしばしば訪問しました。中国は近代化が進み経済的にも大発展しているが、人口比からみると依然農業国といってもいいでしょう。そんな農村の生活に触れるチャンスは、これまでほとんどありませんでした。

今回、たまたま農村地帯を垣間見る機会を得たのでご紹介します。

一カ月前に、私が参加している大連交通大学の囲碁クラブの三浦会長が転居したとき、少々お手伝いをしました。そのお礼にと三浦さんが新アパートの夕食に招待してくださいました。

三浦囲碁クラブ会長宅での夕食会

三浦さんの新居は、バス・トイレ・キッチン付きのワンルーム。これに中二階にベッドがある。

(家賃1,500元<3万円>)。私が住んでいる大学のおんぼろ留学生宿舎(家賃1,800元)よりきれいで、エアコンまでついている。独り住まいには快適に見える。

歓談の途中に、同じクラブ仲間の隋さんがいきました。

——大連郊外にある農村地帯に私がよく知っている、田舎料理を食わせる店があるが、案内しようか。

これにクラブ員の三浦さん、辻本さんと私が大乗り気で、同行することになりました。フォルクスワーゲンを持っているクラブ仲間の李さんが運転して連れて行ってくれました。



■ 大連市金州地区向応鎮土門子村



大連市から北上し、金州区を更に北に向かうこと一時間半で、めざす「吳家小院」につきました。

門から入ると中庭があり、向こう側に農家風の平屋があります。

まずは、待合室風の部屋でお茶を振る舞われた。と言っても、主人ではなく本日案内してくれた隋さんのお手前である。



農家風の入り口をのぞくと、大きな竈があり、サツマイモがこんがり焼きあがっていた。中国のサツマイモは日本のと品種が違い、焼き芋にしたら柔らかい。しかし、ここの焼き芋は市内の屋台で売っている焼き芋よりほっこりしていて、なかなかいい味だった。辻本さんの嬉しそうな顔！ 家の前にも大きな焼き鍋があり、中にふかしたての包子があった。餡は野菜でとてもヘルシー。これも彼女と私がひとつずつ食べた。あまりにも美味しいので二つ三つと食べたいところだが、それでは楽しみにしている昼食が食べられなくなるので我慢した。

昼食まで、まだ小一時間ありました。近くの「小黑山風景区」まで車で行って、ちょっとだけ山

に登りました。歩きながら辻本さんと隋さんの話が弾んでいます。わたしは、中国語を習いはじめてからまだ一年少々ですから、二人に割り込むことに気後れして、黙って二人の話を聞いているだけでした。だが、言っていることが半分も聞き取れません。彼女は大連で中国語学習歴7年の上級者です。私はようやく話すことができるようになった程度で、彼女との実力差は歴然としており、どうしようもない。

一時間少々ハラ減らしの山歩きをして「呉家小院」に戻ると、昼食の用意ができていました。

農家料理

とりたてて変わったものがあるわけではないが、素朴な味が私たちに喜ばせてくれた。それにしても、中年以上の我々はこのボリュームでは食べきれない。残りは、打包（ダーバオ；持ち帰り用にパックに詰める）にしてもらった。なお、北方系の料理では米飯が出ないのが特色。料理名は辻本さんが教えてくれた（さすが女性は詳しい!）



食事中に李さんがお尻を浮かすヘナ恰好で食べているのが不思議でした。が、そのうちに私のお尻がポカポカと暖かくなってきたので理由がわかりました。ここは中国（得に北方系の農家特有）のオンドル暖房なのです。



【左写真】中国では畳が廃れて以来、椅子に腰掛けるのが一般的だが、ここでは、オンドルの上に座ったり、布団を敷いて寝ている。5月になっている今でも、北方では朝晩は冷えるのでオンドル暖房をしているが、本日の昼時には太陽が照っており暖かいので、かえって暑いくらいだ。隣室が炊事場で竈の排熱がオンドルに伝わって各部屋を暖めている。なお、靴をはいたまま屋内に入るのも中国風。

【右写真】隣室もオンドル暖房形式になっている。ここは旅行客の宿泊用の部屋らしい。食事付き一泊でも100元(2,000円)程度と安い。

昼時には、たくさんのグループ客が来て食事していました。

さて、我々囲碁クラブの仲間は、食後に囲碁をして楽しむのが他の客と違うところです。隋さんなじみの老板(主人)が、我々が囲碁をはじめようとすると、さっそく椅子・机の用意、さらにテントまで張ってくれました。五月の昼下がり、日陰で微風が頬をなでる心地よい気分の中で囲碁ができるとは、何と贅沢な遊び方でしょうか(碁盤と石は我がクラブから持参)。



五人の中で、三浦さんと隋さんは6段、李さんは3段、私はず〜と下がって2級、辻本さんは更にず〜と、ず〜と下がって9級である。だから、私は囲碁クラブ十数人の中では、辻本さんのお陰で最弱者にならなくて済んでいる(辻本さんに感謝!)。ただし、辻本さんの名誉のために付記すれば、囲碁では初心者ながら、「太極拳」ではかなり年季がはいっており、今でも毎朝遠くの公園に出向いて訓練を怠らないとのこと。帰国したら友人に太極拳を教えるのが目標といっている。なお私は、三浦さんに六子置いた対戦で善戦するも、最後に逆転されて負けた(あと一歩の詰めが甘く、この”狸オヤジ”に翻弄されて負け続けている)。

夕日が西の空に傾きかけたころ、我々は「呉家小院」を辞しました。

隋さんがもう一箇所案内したいところがあるといいます。



■ 麗江庭院・歸田居

着いたところが、寺院ではなかろうかと思いましたが、じつは個人の別荘でした。持ち主は、不動産の売買で財をなし、こんな田舎に広大な住宅を建てました。隋さんから説明を聞きながら「麗江庭院・歸田居」のいわれを知りました。

●その一

「麗江庭院」とは、雲南省の名所「麗江古城」にあったものを、そのままここへ移転させたことからの由来だそうです。わたしは、昆明赴任時代に「麗江古城」を観光したことがあります。かなり俗化されすぎていたことに少々失望しました。そんなところで老朽化していくくらいなら、ここの大自然の中に移されて手厚く守られていたほうが、建物にとっては幸せではないかとすら思いました。

●その二

「歸田居」とは、漢詩の趣味がおありの方なら思い出されるでしょう。東晋時代の田園詩人陶淵明の「歸去來の辞」、

——歸りなんいざ 田園まさにあれなんとす なんぞ歸らざる

で、しられる詩から発想して命名したものと思われます。じつは、5、6年前、私は江西師範大時代に陶淵明の故郷九江市郊外の「陶淵明記念館」を訪れたことがあります。ところが、陶淵明ゆかりの地に建てられた「記念館」の周囲は殺風景で、陶淵明が晩年過ごしたはずの豊かな田園風景など、何処にも見られなかったのが不満でした。しかし、緩やかな斜面に広がる緑豊かなこの地にひっそりと佇む「歸田居」は、陶淵明の過ごした地とは同じではないにしても、彼の世界を彷彿とさせるものがあるような気がしました。そう考えると、「歸田居」の持ち主は、単なる儲け主義の不動産屋とは違って、きっと陶淵明に思いを寄せる風流人なのだろうと想像できます。

現在、「歸田居」は食堂兼宿泊施設として旅行客に開放されています。室内を見て回りましたが、食事用個室や寝室は中国風オールドファッション調でなかなかよらしい。

三浦さんがいいました。

「奥さんや日本の友人が大連に来たら、『吳家小院』や『帰田居』に案内したら喜ばれるよ」
なるほど、当地にはさしたる名所古跡があるわけではないが、緑豊かな僻地でゆったりと時を
過ごすのが現代のニーズに合っているのでしょう。

上の写真右にあるように、上階のベランダに座り、茶を喫しながら下界を見下ろしました。彼
方の田園地帯では野菜や果実類など近郊農業が盛んだそうです。

■ 終わりに

こうして、隋さん李さんのご厚意による日帰り農村旅行が終わりました。

教師時代には学生と日本語で自由自在に話し合うことができましたが、隋さん李さんのような
成人中国人とは、私の中国語が未だ未熟なために十分な交流のできないのが残念です。しかし、
彼らの我々に対する態度を見ていると、日中間の壁など意識する必要が全くありません。年長の
隋さんは社交家、李さんはちょっとはにかみ屋といったところですが、一日行動を共にしただけ
で、一挙に心の交流が進みました。

この地は7月頃には「紫雲花汐莊園」のラベンダーの花が、辺り一面まるで「花の海」のよう
に咲き乱れるのだそうです。その頃にもう一度訪れてみたい。それから、近くには温泉も湧出し
ているといいます。これも楽しみです。 (了)



ラベンダーの海 (インターネットより)

http://japanese.djzly.com/Experiencein_Jinzhou/Agricultural_Tourism/4593.shtml

